

メルロ＝ポンティとアーレント

— 幼年期の観点から —

Merleau-Ponty and Arendt

— From the point of view of Infancy —

澤田 哲生
Tetsuo SAWADA

目 次

序論

1. 先取りと退行
2. 大人のなかの子ども／子どものなかの大人
 - 2.1. 大人のなかの子ども
 - 2.2. 子どものなかの大人
3. 始まりとしての子ども
4. 大人、あるいは第二の誕生
5. 大人のなかの子ども、あるいは遺言なしの遺産

結論

序論

1949年から1952年まで、モーリス・メルロ＝ポンティはソルボンヌ大学文学部で発達心理学と教育学の講座に所属し、週2回講義を行っていた。毎回の講義の記録は同学部の『心理学紀要 (*Bulletin de psychologie*)』誌に掲載され¹⁾、哲学者の死後、『ソルボンヌ講義』(CS, 以下『講義』)としてまとめられた。

この『講義』のなかで、メルロ＝ポンティは、同時代の発達心理学、児童精神分析、民族学、等々、哲学とは異なる学問分野の諸概念を学部生たちに紹介している。子どもを研究対象として直に観察したわけではない哲学者が、心理学や教育学を専攻する学生たちに講義を行う。こうした特殊な経緯から、『講義』では、発達心理学や教育学の教科書的な紹介にとどまらず、両学問分野およびその方法に対する哲学者独自の批判的な見解や解釈が随所に提示される。

『講義』のなかで、メルロ＝ポンティは、子どもという存在、その思考と行動様式を現象学という思想から考察し直し、その成果を現象学そのものにフィードバックしようとする。聖アウグスティヌス(『告白』)、ルソー(『エミール』)、ニーチェ(『反時

代的考察』)など、少数の例外はあるものの、多くの哲学者たちは子どもという存在ないし幼年期という現象に言及しながらも、そこに肯定的な見解を見出さなかった。そもそも哲学史の源流に位置するプラトンですら、子どもという存在には辛辣である。『ソフィスト』において、子どもは、実物と似姿の区別ができない、「知恵のいかない [= 知性を欠いた]」(*Sophiste*, 234b) 存在と提示される。人には誰しも幼年期がある。幼年期は知的に経験されないとしても、身体的に体験される。これは哲学者といえども同じだろう。幼年期を人格と知性の未熟な時代と切り捨てず、現象学的な観点から深く考察した点において、メルロ＝ポンティの『講義』は、異分野科目の講義記録を超える価値を備えている。

とはいえ、同時代の哲学者たちの思索を俯瞰するならば、子どもへのまなざしはメルロ＝ポンティの仕事に限定されるわけではない。彼と同世代の哲学者、ハンナ・アーレントも、子どもに対する独自のまなざしを持った哲学者であった。その成果は、『人間の条件』や『過去と未来の間』に顕著である。メルロ＝ポンティとアーレントという同世代の二人の哲学者の思想的な対比に関しては、ロナルド・ベイナーの指摘 (Beiner 1982, 100) を嚆矢として、主に政治哲学の文脈で議論がなされてきた。かたや

子どもないし幼年期という問題に関しては、メルロ＝ポンティの研究においても未だに十分に検証がなされておらず、アーレントとの関連までを含めるなら、手つかずの状態である。こうした学説的な課題も踏まえ、本発表では、メルロ＝ポンティの『講義』を概観した後、その成果をアーレントの子どもに関する思索と対比する。

1. 先取りと退行

最初に、『講義』におけるメルロ＝ポンティの子どもへの視座を、もっとも明確に表している箇所を引用してみたい。

[...] 精神分析は、先取りと同時に、つねにありうる退行の両方を強調します。子どもは、その時々的手段に対して主体が選び取る、一種の前進によって定義されます。生誕は未熟によって特徴づけられます。最初のエディプス的な推力は、一種の前－思春期もしくは「心理学的な思春期」です。子どもは未来を生きますが、大人は退行する可能性があります。幼年期は、けっして完全には達成されません (CS, 319/187)。

「幼年期は、けっして完全には達成されません」とメルロ＝ポンティはこの箇所では謎めいた指摘をしている。子どもは時間の経過とともに、否応なく大人へと成長する。人の一生のなかで、幼年期は大人への移行とともに「達成」され、それは過去の経験となるはずだろう。

では、なぜ達成されないのか。上記のメルロ＝ポンティの指摘によるなら、子どもは、ある部分において、「子ども」ではないからである。言いかえるなら、子どもは未熟でありつつも、ある部分において、大人の世界に「前進」している存在でもあるからである。知性の未熟さや身体の発達という視点を持ち込むなら、たしかに、子どもは子どもでしかない。しかし、子どもはこれから到来する大人の世界(「未来」)に、全身でないにしても、片足でいどは踏み込んでいる。

かたや、いわゆる「大人」に関しても、メルロ＝ポンティは同じ主張をしている。成人年齢に達した人間は、たしかに大人である。物ごとの考え方、身

体的な特徴、知性の成熟度など、どの点を見ても、大人はもはや子どもではない。大人である。しかし上記の引用で、メルロ＝ポンティは大人が子どもに「退行」する可能性を指摘している。大人の生活には、一度は通り過ぎたはずの幼年期に引き戻される可能性がつねに伏在しているのである。

子どもは幼年期を生きながら、ある部分で、大人の世界に片足を突っ込んでいる。大人は幼年期を乗り越えたと知性の水準で理解してはいても、実存的な水準では幼年期に引き戻される可能性に晒されている。したがって、メルロ＝ポンティによれば、発達段階としての純粋な「幼年期」という時代は人間の一生には存在しない。

2. 大人のなかの子ども／子どものなかの大人

2.1. 大人のなかの子ども

子どもは大人の生活を先取りする。大人は子ども時代に引き戻される。子どものなかに大人がいて、大人のなかに子どもがいる。一人の人間のなかに、複数の時代(幼年期のなかの成人期／成人期のなかの幼年期)が共存している。

この複合的な実存様式に関して、まずは〈大人のなかの子ども〉を確認してみたい²⁾。この現象に関して、『講義』のメルロ＝ポンティは児童精神分析の研究成果を忠実に踏まえた議論をしている。「自己愛」(S・フロイト)、「自己中心性」(J・ピアジェ)、それに付随するサディズムとマゾヒズム、他者への攻撃性と他者に対する不安の循環(M・クライン)、等々——幼年期に固有の諸現象を、メルロ＝ポンティは幼年期の人間が体験する一過性の現象ではなく、大人となった人間にも伏在する現象であると考える。彼の議論の特徴は、大人の生活における幼年期の諸経験の偶発的な出現にある。この出現は、政治的な暴力という形も取れば、芸術作品による既存の文化の刷新という形も取る。

政治的な暴力としての出現に関して、メルロ＝ポンティは『講義』と同時期の「マキアヴェッリ覚書」という論考で言及している。君主は民衆を理不尽に押さえつける。しかしマキアヴェッリによると、こうした君主の過剰な攻撃性は、民衆の反抗に対して君主が抱く不安と表裏一体で形成される。このように君主は「攻撃性」と「不安」の循環のなかを生き

ており、メルロ＝ポンティはこの循環関係のなかに幼年期の残存を読み取る。

芸術作品、あるいは新たな表現の発生に関して、メルロ＝ポンティは、人類学者ジョルジュ＝アンリ・リュケの『子どもの絵』を参照する。「多面投影法」、「継時混淆型」、「エピナール型」、等々、子どもに固有の描画法は、不可逆的な現象である。人は遠近法による描写方法を学んだ後、これらの描画法に基づいたデッサンを二度と実現できなくなる。しかし、メルロ＝ポンティが指摘するには、芸術家と呼ばれる人々は、人がすでにできなくなってしまった表現方法を、例外的に再現することができる。つまり、遠近法の枠組みに回収されない幼年期の表現に回帰することができる。その理由を、メルロ＝ポンティは次のように説明する。「われわれの態度は、幾何学的遠近法が他のものより正しいという前提を含んでいます。現代絵画の試みはこの前提を問い直し、それとは別の見方に積極的な意味を与えました。ピカソにとって、複数の横顔は一つの表現方法でした」(CS, 172-173/3)。ピカソは伝統的な絵画法を一通り習得しそれを実践するなかで、自分を教化したはずの伝統的な絵画法（「幾何学的遠近法」）の外部（アフリカ彫刻、キュービズム、シュルレアリズム、等々）を発見した。上記のメルロ＝ポンティの指摘によれば、ピカソが新たな技法で提示した作品は、遠近法絵画に慣れ親しんだ大人には荒唐無稽に見えても、子どもにはすんなりと受け入れられる。ピカソが発見した遠近法の外部は、部分的であるにせよ、子どもが実践する描画法（とりわけ「多面投影法」と「継時混淆型」）に呼応しているのである。このようにメルロ＝ポンティによれば、芸術家と呼ばれる人々は、大人が疑わないような既存の制度の外部を垣間見させてくれる点において、子どもの表現世界と潜在的に交流している。

以上のように、幼年期が大人の生活で現出するのなら、その現出の仕方は、政治的な場面における暴力の形も取れば、既存の表現方法（「幾何学的遠近法」）の刷新という形も取るのである。加えて、幼年期の諸現象は、メルロ＝ポンティの現象学的な思索にもある一定の寄与を果たしている。「自己愛」ないし「自己中心性」という現象について簡単に触れておきたい。メルロ＝ポンティは大人における幼年期の残存という観点から、この現象が大人の身体

的な生に残存することを強調する。『講義』から10年後の『見えるものと見えないもの』（遺稿）で、彼は「自己愛」という現象にあらためて言及する。そして、「肉」という身体概念を構築する際に、自己愛をその重要な構成要素（「私の肉」、VI, 302-303）として導入する³⁾。この点においても、大人となった人間、つまり幼年期を乗り越えたように見える人間に幼年期の諸現象は、根強くしかも潜在的に残存するのである。

2.2. 子どものなかの大人

次に、〈子どものなかの大人〉を確認してみよう⁴⁾。これを端的に表す現象として、『講義』のメルロ＝ポンティは「転嫁」という現象を紹介している。この現象を発見したのは、ドイツの発達心理学者、シャーロッテ・ビューラーである。彼女は、アンゲルスとペーターという同年齢の二人の子どものやりとりを観察した。力に勝るアンゲルスは、弱いペーターのおもちゃを取り上げる。この強奪行為は何度も繰り返される。ペーターが新しいおもちゃを手にするたびに、アンゲルスはそれを欲しくない時ですら、ペーターから取り上げる。最後に、ペーターはアンゲルスの傍らにだまって座り込む。そして最後に泣き叫ぶことで、大人が介入する。これは一見するなら、幼児教育施設で起こりがちな、けんかやいさかいでしかない。しかし、メルロ＝ポンティは、アンゲルスがペーターの弱さに引き込まれ、そのすべてを手に入れようとする姿勢のなかに、ヘーゲルの主人と奴隷の弁証法の萌芽を読み取る（CS, 321/189）。主人は奴隷の所有物だけでなく、奴隷の自由そのものを手に入れようとする。言いかえるなら、奴隷がみずからが奴隷であることを自発的に「承認」(Id.) することを要求する。主人が本来手に入れられない他者の自由を欲するように、アンゲルスは、ペーターの所有物に飽き足らず、ペーターの自発的な従属までも欲する。子どもはそれとは知らないまま、いわゆる大人の世界で生じる主従的な対人関係を体験しているのである。

この自他の区別が十分についていない「情動的」な局面を体験した後、子どもは他者目線での行為や「道徳」に目覚める。ピアジェやワロンをはじめとする発達心理学は、情動的な段階（自己中心性）から道徳的な段階（脱中心化）への移行を強調する。

こうした段階的な発達に主眼を置いた議論に対して——言い換えるなら、大人という到達点から子どもを見る視点に対して——、メルロ＝ポンティは情動的な局面を成長の一つの段階と考えるのではなく、この段階がこれから到来する大人の生活にすでに浸食していることを主張するのである⁹⁾。

3. 始まりとしての子ども

以上のメルロ＝ポンティの子ども論を踏まえ、今度はハンナ・アーレントの子どもに対するまなざしを見てみたい。主著の『人間の条件』と同時期の「教育の危機」(『過去と未来の間』所収)で、アーレントは、子どもという存在を「新しい」存在と主張している。

子どもはすべての生き物と生成の状態を共有する。生命とその発達という観点から見れば、子どもはちょうど子猫が猫への生成過程にあるように、人間への生成過程にある。しかし子どもは、彼が生まれる以前から存在し、彼の死後も存続し、そして彼がその生活を送ることになる世界との関係においてのみ新しいのである(BPF, 185/251)。

この引用において、アーレントは、子どもという存在を孤立した個人として扱わず、その子がこれから関わる「世界」との関係で考察している。生まれてくること、世界に到来すること、その世界ですべてに生きている者たちに加わること——一連の誕生に関わる現象は、生物学的な意味での出産やその後の成長の発達心理学的なプロセスだけを意味するわけではない。子ども、つまり新しく世界に到来する者は、はっきりとした形でないにせよ、既存の世界にある種の新鮮さをもたらす。アーレントはこの新鮮さを人間社会の発展の基礎であると考えた。したがって、彼女は人間が形成する社会を、「けっしてあるがままにとどまることなく、誕生、つまり新しい人間の到来によって絶えず自らを更新する人間社会」(Ibid., 285/249)と記述する。教育に関しても、アーレントは、「生まれてきたこと〔natality〕、つまり人間は世界のなかに生まれてくるという事実」(Ibid., 174/234)を前提として、教育活動を実践す

るべきであると指摘する。

すでに見たとおり、メルロ＝ポンティは、子どもが子どもでありながら、未来の世界や大人の世界に開かれていることを強調していた。アーレントも、子どもが世界に到来し、大人の世界に新鮮さをもたらすことを強調することにより、子どもと(過去と未来の)世界の関係を重視する。この点において、二人の哲学者の子どもへのまなざしには共通した特徴が確認されるだろう。

しかし、両哲学者の子どもの視座には微細なちがひも確認される。メルロ＝ポンティは一貫して、子どもが世界と未来に開かれていることを強調した。これに対して、アーレントは、子どもが世界へ開かれているとしても、その開かれ方のていどには慎重な態度を示す。

しかし人間の親は、受胎と分娩によって自分の子どもたちを生命へと招来しただけでなく、同時に子どもたちを世界のうちに導き入れたのである。教育において、親は子どもの生命と発達、および世界の存続という二つの責任を負う。この二つの責任は、けっして一致しない。実際、両者は相互に対立する。子どもの発達に対する責任は、ある意味で世界に敵対する。子どもは、世界から破壊的なことが何一つふりかからないように特別な保護と気遣いを必要としている(BPF, 185-186/250)。

「世界」、つまり子どもがこれから本格的に参入する場に、子どもはすぐに適応するわけではない。時として「世界」は危険な側面を子どもに垣間見させ、場合によっては、子どもの生命活動に「破壊的な」出来事を引き起こす。知性や判断能力が十分に発達していない子どもが高い依存性を備えた商品(タバコ、酒類、携帯電話、等々)に自由にアクセスできたとしたら、あるいは他者の生存に関わる高度な判断能力が必要とされる場(政治、経済活動、等々)で判断を迫られたとしたら、その結果は、まさに「世界」による子どもの「破壊」を引き起こすだろう。したがって、アーレントは子どもと世界の間を重視しながらも、親もしくは大人による子どもの「保護」、「気遣い」、ひいては「教育」の重要性も指摘する。

メルロ＝ポンティの議論を思い出してみたい。メルロ＝ポンティは、子どもから大人への段階発達論的な移行を批判した。言い換えるなら、子どもを子どもとして単独でとらえる視点を批判し、子どもが否応なく大人の世界に開かれている事態（子どものなかの大人）を重視した。それに対して、この箇所のアーレントは子どもを子どもとして、つまり「保護」の対象として扱う立場を取っている。この点において、両哲学者の見解は一致しない。とはいえ、この不一致はきわめて表層的な不一致だろう。二人の哲学者は、子どもという存在（あるいは誕生という現象）を考察する際の前提として、第一に子どもと世界との関係——子どもによる大人の世界の先取り（メルロ＝ポンティ）あるいは子どもの世界への到来（アーレント）——を提示する。この関係が子どもの成長と発達をつうじて具体的に分節する過程において、一方（メルロ＝ポンティ）は子どもの世界への無制限の開かれを強調し、他方（アーレント）はそうした過度な開かれ方に警鐘を鳴らすのである。

4. 大人、あるいは第二の誕生

では、二人の哲学者が子どもの世界との関係——つまり、世界に新たに到来した者とすでに存在している人々との関係——を重視しているのなら、この関係において、アーレントは大人という存在をどのように考えたのだろうか。先に見たとおり、「教育の危機」のアーレントは、すでに世界に存在する者たち（大人）による子どもの「保護」と「教育」を主張していた。

しかし、同時期の主著『人間の条件』を確認するならば、アーレントが考察する大人の役割が、子どもの「保護」や「教育」という制度的な枠組みに回収されないことが確認される。『人間の条件』第24節（「語りと活動における行為者の開示」）を見てみよう。

言葉〔word〕と行為〔deed〕とともに、私たちは自分自身を人間世界に挿入する。そしてこの挿入は第二の誕生のようなものである。この生誕のなかで、私たちは自分の原初の身体的外観のむき出しの事実を、自分自身で確認し引き受

ける。この挿入は労働のような必要性に強いられないし、仕事のような有用性によって促されるのでもない。それは、私たちがその仲間に加わろうと望む、他者の存在〔presence〕によって刺激されるが、けっして他者によって条件づけられない。この挿入の衝動は、私たちが世界に生まれたとき世界に到来した始まり〔beginning〕であり、私たちが何か新しいこと〔something new〕を自分自身の主導〔initiative〕で始めることによって応答する始まりから生じる（HC, 176-177/288, 強調の傍点は引用者）。

この文脈において、アーレントは、活動的生の構成要素である「言葉」（「語り（speech）」、*id.*）と「行為」（「活動（action）」、*id.*）を説明している。この二つの営為によって、人は世界のなかに入っていく。アーレントの用語で説明するならば、人はこの二つの営為をつうじて、私的な空間で抱きがちな「虚栄」や「仮象」（*Ibid.*, 176/288）を抜けて、他者の存在から構成された「複数性」（*Ibid.*, 176/286）の世界、つまり公的空間に参入する。

この参入（「挿入」）は、アーレントが上記の引用で説明するには、飢えや渇きなどの肉体的欲求の充足（「労働」）や目的に沿った所定の作業（「仕事」）からは実現されない。さらに、それは他者の存在に触発されたとしても、他者に依存した行為でもない。アーレントは、この世界への挿入を「始まり」という用語で記述する。この始まりは「何か新しいこと」を常に予告する。予告はするが、「仕事」のように明確な完成図が描かれているわけではない。「何か新しいこと」に不可避的に結びつくのであるから、この「始まり」は過去の出来事の機械的な反復でもない⁹。つまり、「始まり」は過去と未来という時間的な規定に縛られないのである。

まさにこの「始まり」という現象のなかに、アーレントの大人への真の視座が確認できる。上記の引用において、アーレントは、「始まり」を「第二の誕生」と命名している。第一の誕生は当然のことながら出生である。すでに「教育の危機」の箇所を確認したとおり、アーレントにおいて、新たな人間の出生は、世界への到来であると同時に、当の世界の「更新」を予告するものでもあった。翻って上記の引用を確認するならば、この出生にともなう人間社会

の更新は、人間の出生から発達にいたる過程で消え去るわけではないことが確認される。上記の引用のとおり、大人となった人間においても、出生は「第二の誕生」という形で実現される。人間は生物学的に一度しか生まれることを経験しない。しかし、複数の人びとが集まる世界における「活動」という観点から見ると、大人は幼年期を抜け出た後でも、何度も生まれる。言いかえるなら、複数の人びとからなる世界に参入することで、虚栄、仮象、生理的欲求、社会経済的なルーティーンワークを抜け出て、何度でも新しく生まれ変わるのである。

子どもが世界に到来することが「誕生」であり、そこで大人の世界にある一定の変化がもたらされるとするならば、以上に見た「第二の誕生」は、たとえそれが大人による子どもの「保護」や「教育」の形を取るとしても、子どもがもたらした世界の「新しさ」に対する大人の側の応答であるともいえるだろう。

以上のアーレントの議論を踏まえ、ここでメルロ＝ポンティの議論を思い出してみたい。彼は、幼年期の諸現象が一過性の現象ではなく、大人となった人間に伏在することを絶えず主張していた。かたや上記のとおり、アーレントも幼年期（出生および世界への参入）を一過性の現象でなく、大人となった人間にも密接に関わる現象であると考えた。この点において、二人の哲学者の大人への視座には同じ枠組みが確認される。しかし、大人の生活における幼年期の現れ方という観点を導入するならば、二人の哲学者のスタンスのちがいがも明らかである。メルロ＝ポンティによれば、大人に潜在する幼年期は、その生活において、否定的な形で現れることもあれば、肯定的な形で現れることもある。政治的な暴力や専制的な人格（主人と奴隷）を生み出す点において否定的でもあれば、人々が予期しなかった新たな表現（反遠近法絵画）のきっかけとなる点において肯定的でもある。かたや、アーレントは、世界への「挿入」を既存の世界の更新（「何か新しいこと」）とみなしている点において、幼年期（出生から世界への挿入まで）という現象を、きわめて肯定的な現象と考えている。このように、両哲学者の大人への視座を確認するならば、両者の幼年期という現象への視座のちがいがまた明らかとなるのである。

5. 大人のなかの子ども、あるいは遺言なしの遺産

以上の議論を踏まえて、最後に、子どもの「出生」と大人の「第二の誕生」、端的に言うなら「始まり」という現象をあらためて考察してみたい。この「始まり」の現象は、すでに見たとおり、生理学的な欲求や社会的なルーティーンワークの外部で生じ、当事者の過去や未来に束縛されることもない。

『過去と未来の間』の序文（「過去と未来の間の裂け目」）で、アーレントはこの「始まり」の現象を、時間という観点から具体的に説明している。参照されるのは、詩人ルネ・シャルの「私たちの遺産にはいかなる遺言も付されていない〔Notre héritage n'est précédé d'aucun testament〕」（OC, 190）というアフォリズムである。『イプノスの綴り』（1946年）に記載されたこの文言は、シャルによる対独抵抗運動（レジスタンス）の回顧的な総括である。シャルによれば、レジスタンス運動はたしかに、一つの「遺産」——アーレントの用語で「宝」（BPF, 5/4）——として残った。しかし、運動が遺産として残されたとしても、当時運動に参加していた人々にとって、それがいかなるものであったかは謎のまま残された。抵抗運動が終わった後、活動家たちは凡庸な日々の生活（「悲しい鈍さ」、cf. OC, 220, BPF, 4/2）に戻った。活動の成果は遺産として残されたものの、この遺産は、いつ、どこで、誰から遺贈されたのかもわからないまま運動に参加した各人の精神に滞留し続けた。したがって、遺産に贈り主の「遺言」は付いていない。このように、シャルは、回顧的な視点から、公的空間における政治運動を贈り主の名のない遺産と書き記す。このシャルのアフォリズムをめぐって、アーレントは、抵抗運動を次のように評価する。

すべての仮面をはぎ取られたこの裸の状態のなかで〔…〕、自由の出現により、彼ら〔シャルも含む作家や文人〕は初めて自分たちの生にとどまった。自由が出現したのは、もちろん彼らが暴政やそれ以上の悪事に反抗したからでなく、彼らが「挑戦者」となったからであり、自分たち自身に対して主導権を握り、ゆえに、それを知らないまま、ましてや気づくこともなく、

自由が出現する彼ら自身の間の、あの公的空間を創り始めたからである（NPF, 4/2-3, 強調は引用者）。

この引用において、アーレントは、シャルたちの抵抗運動以上に、当の運動のなかにいる人びとの「自由」な在り方を評価している。この「自由」のなかで、彼らは、自分自身の在り方を自覚しながらも自己の利害にとらわれることなく、仲間たちと抵抗運動を組織した。彼らは自分自身の使命と役割を理解していた。つまり、自分の行為の「主導権」を自分なりに把握してはいた。しかし、彼らは、自分たちが参集する「公的空間」というものがどういふものかは理解していなかった。言い換えるなら、「公的空間」の内実を理解してはいないものの、各自が動作主となり、自分たちの置かれた状況を「公的空間」として「創り始めて」いた。このように、「始まり」という現象は、当事者の誰もが内実を「知らないまま」、つまり当の空間の所有者とならないまま、成立するのである。

抵抗運動が終わった後に、公的空間は一つの「遺産」として遺された。しかし、その性質は、どの当事者の経験や記憶からも十分に定義されないまま、日々の生活の中で忘れ去られた。「それゆえ、宝〔遺産〕がどのようなものであったかを誰よりも先に忘れた人びとこそ、宝を所持し、それがあまりに風変わりに見えるので、どのように名づけるかすらわからなかった人びとである」（BPF, 6/7）。抵抗運動のあいだ、運動の当事者たちは、自分たちの運動（「宝」）が、どのようなもので、そこにどのような「名」が冠せられるかを知らないまま、運動に従事していた。「名」はないが、活動の場は「公的空間」として当事者たちを集結させた。「名」による定義がなされない以上、抵抗運動の終結後、遺産は忘れ去られた。

この文脈において、アーレントは回顧的な視点を導入する。この謎にとどまった遺産の内実を後から考察するなら、それはなぜかよくわからないが、「1776年のフィラデルフィアの夏」（アメリカ革命）、「1789年のパリの夏」（フランス大革命）、さらにはレジスタンス運動以後に生じた「1956年のブダペストの秋」（ハンガリー動乱、BPF, 5/3）と結びつく。しかし、抵抗運動に従事した個々の参加者は当時、

これらの出来事を具体的な実体としてイメージしたり予感したりしながら抵抗運動に参加していたわけではない。実際に、運動の当事者であるシャルは、「私たちには未知で、私たちには到達できない、勇氣と静寂を活発にするこのランプの黄金色の点でないとすれば、われわれは誰にも属していない」（OC, 176, 傍点は引用者）と記している。当事者たちが運動のただ中で拠り所としていたものは、歴史に明確に記載された過去の出来事（アメリカ独立戦争、フランス大革命、等々）ではない。拠り所があるとすると、それは、個々の抵抗運動参加者の疲労と絶望を照らし出す「ランプ」の灯のような微細で刹那的な現象でしかない。レジスタンス運動は、事後的に見れば、歴史上の政治運動を呼び起こす。しかし現象そのものとして見れば、つまり当事者たちの「活動」そのものから見るなら、それはいかなる事例やモデルも参照対象としないのである。

しかし回顧的な視点から見ると、つまり「遺産」として検討するなら、この抵抗運動は、運動の当事者たちが当時考えもしなかった過去の革命（アメリカ革命、フランス大革命）や、予期もしていなかった未来の抵抗運動（ハンガリー動乱）と結びつく。このことは、「始まり」という現象の非時間的な性質とその内実を具体的に表している。たしかに、「始まり」という現象は、個々人の過去の私的経験や未来への個別的な志向とは一致しない。現象の起源を個人レベルに求めても、確認されるのは、すぐに消え去る「ランプ」の灯でいどのものである。このように、「始まり」という現象は、個々人の体験の把持や予持に回収されず、超時間的な現象にとどまる。他方で、回顧的かつ集団的な視点から見ると、「公的空間」の創設を告げる「始まり」という現象は、個々人の過去の経験や未来への志向を超えた事象（過去と未来の革命）を、当の個々人の活動に呼び込む。したがって、この現象が過ぎ去った後、それは個々人には不可知なままにとどまりつつも、過去の政治的な出来事に接続され、未来の政治運動を予告するのである。

以上のように「第二の誕生」を検討するなら、アーレントは大人の役割を子どもの保護や教育に限定していないことは明らかである。大人は子どもをケアの対象としつつも、公的空間への参入という形式において自ずから新たに誕生する。「始まり」、「誕

生]、「世界」への参入を幼年期の出来事に限定せず、大人の世界でも起こりうる、しかも集団的かつ公的な歴史的出来事と考察した点に、アーレントの子どもへの視座の一つの成果を読み取ることができる。

結論

以上のとおり、幼年期という観点から、メルロ＝ポンティとアーレントを並行して考察した。その結論として、以下の2点は少なくとも指摘できるだろう。

(1) 最初に、これは序論で提起した問題の確認となるが、二人の哲学者は人間の幼年期を未熟な経験と切り捨てず、むしろそれを思索にとっての重要な素材としていることが確認できる。本論で見たとおり、幼年期という現象がメルロ＝ポンティの身体論および政治哲学に果たした役割、子どもという存在の新しさがアーレントの構想する「公的空間」の形成に果たす役割を振り返るなら、幼年期が両哲学者の思索に重大な意味を持つ現象であったことは明らかだろう。

(2) 次に、子どもという存在が両哲学者の政治哲学、とりわけ共同性に関する考察に果たした役割が提示される。メルロ＝ポンティは、幼年期の諸現象が大人への成長過程で消失する一過性の出来事ではなく、大人の生活に根強く伏在する出来事であると考へた。この幼年期の残存が、当事者の成長過程で気づかれないうまま、当事者の政治的な人格や表現の母胎となる。かたや、アーレントによれば、子どもという存在が世界に新たに到来するからこそ、大人はこの新参者を危険に曝さないよう、世界を新たに整備する。こうした世界の再構成をつうじて、大人は「第二の誕生」を経験する。そして子どもと大人のそれぞれの「誕生」をつうじて、「公的空間」そのものが絶えず更新される。

たしかに、身体、言語、思考、行為、等々のどの点に着目しても、子どもは未熟な存在でしかない。しかし、身体を媒介とした間主観的な共同体(メルロ＝ポンティ)も、自由な言葉と行為から形成される公的空間(アーレント)も、幼年期の現象ないし子どもの到来なしには成立しないことを、両哲学者は教えてくれるのである⁷⁾。

註

- 1) 各講義の日時、メルロ＝ポンティによる講義ノート¹⁾の修正の有無、哲学者の死後に出版された『講義』(CS)との異同については、拙著を参照。Cf. 澤田2020, 305-314.
- 2) 以下〈大人のなかの子ども〉に関する詳細な議論は、拙著(澤田2020)の第二部第二章、第三部第二章、等々を参照。
- 3) メルロ＝ポンティは『講義』でフロイトの自己愛理論を詳しく考察することで、後期思想において「肉」という身体概念を「私の肉」(自己愛的な身体)と「世界の肉」(自己愛的な身体を脱中心化する身体)に腑分けすることになる。詳しい議論については、拙論(Sawada 2023, 澤田2023)を参照。
- 4) 以下〈子どものなかの大人〉に関する詳細な議論は、拙著(澤田2020)の第二部第一章、第三部第三章、結論、等々を参照。
- 5) このようにメルロ＝ポンティによれば、子どもと大人は互いが意図的に交流する以前に(そもそもそうした交流はきわめて人為的で不自然である)、双方の顕在的に未知の部分(子どものなかの大人)と潜在的に既知の部分(大人のなかの子ども)を介して、すでに濃密な交流を実現している。『講義』の数少ない先行研究のなかでも、西岡けいこの研究は、メルロ＝ポンティのワロン解釈に関する考察(西岡2005、第Ⅲ章)と実際に観察した教育実践の事例(西岡2005、終章)から、この交流の様態を鮮やかに描き出している。

『講義』に関する研究として、酒井麻依子の著作も挙げておく必要がある。しかし、この著作は、『講義』のコーパス全体を射程に収めたうえで「他者」の問題を考察しながらも、上記の観点を見落としてしまっている。その結果として『講義』の射程を、対人関係の原理的な不平等(子どもと大人の非対称な関係)を平等に導かねば「ならない」(酒井2020、288)という単線的な成長段階の記述へと切り縮めてしまっている。この結論は、現象の根源(子どもと大人の非対称な交流とその豊かさ)から論点を逸らし、現象の可視的な表層(非対称な交流とその豊かさが消失した後、そこで起きていたことを大人の目線から事後的に考察した水準)に議論を移してしまった帰結と言えるだろう。

う。したがって、その結論も「平等な共存を築かなければならない」（酒井2020、*ibid.*、傍点は引用者）という、当為を強調した義務論的かつ一面的な結論にまとまる。西岡が適切に述べているように（西岡2005、iii-vi）、ワロンやピアジェをはじめとする発達心理学の先駆者たちは、大人による子どもへの一方的な知識の伝達という、ヘルバルト式の古典的な近代教育学、さらにはそこで展開される義務論的な教育理論を批判し、子どもの観察に重点を置いた教育論を展開した。かたや、メルロ＝ポンティは、ピアジェが観察した子どもの諸事例を評価しつつも、彼のアプローチに伏在する大人目線の分析方法を批判し、子どもそのものを子どもの目線から現象学的に考察することの重要性を指摘した。酒井の著書の段階発達論的な論調（不平等から平等へ）と義務論的な結論（「ならない」）から『講義』を読むなら、その帰結は、メルロ＝ポンティが展開した子どもと大人の多様な交流様式をヘルバルト式の義務論的な教育学にまで後退させる試みにしかならず、おおよそ『講義』の主旨を逸脱した結論にしか行きつかない。

- 6) 『人間の条件』に大幅な加筆を加えた『活動的生』の同じ節で、アーレントは始まりに備わる偶発的かつ非連続的な特徴をいっそう強調する。「始まりは、既在し生起したことのほうから見れば、まったく予想外の算定不可能な仕方世界へと突発してくる。この突発性は、どんな始まりの本性にもひそんでいる」（VA, 166/220）。
- 7) 本研究は、第12回ハンナ・アーレント研究会（東北アーレント研究会、2023年9月6日）における発表原稿を加筆・修正したものである。アーレントでの発表を依頼くださった森一郎氏（東北大学）、『学ぶと教えるの現象学研究』誌に誘ってくださった田端健人氏（宮城教育大学）、その他関係各位のご助力に感謝申し上げます。論文の作成は、東北大学教育学研究科「国際共同研究推進事業助成」の枠組みで行われた。

引用文献

使用文献と略号

※既刊の邦訳は可能なかぎり参照したが、基本的には論者が訳出した。訳文の責任は論者にある。引用

に際して、略号を示した後、アラビア数字で頁数を明記する。邦訳が参照されている文献に関しては、スラッシュの後に邦訳の頁数も併記する。引用文中の亀甲括弧（〔 〕）は論者による補足である。

(1) 欧文の文献

- Arendt (Hannah) , [HC] : *The Human Condition*, Chicago, The University of Chicago Press, 1958. (『人間の条件』、志水速雄訳、ちくま学芸文庫、2000年)
- [VA] : *Vita active oder Vom tätigen Leben*, Stuttgart, Piper Paper Books, 1960. (『活動的生』、森一郎訳、みすず書房、2015年)
 - [BPF] : *Between Past and Future. Eight Exercises in Political Thought* (1968) , Chicago, New York, Penguin Books, 1977. (『過去と未来の間 政治思想への8試論』、引田隆也・斎藤純一訳、みすず書房、2021年)
- Beiner (Ronald) , [Beiner 1982] : “Hannah Arendt on Judging”, in *Lectures on Kant's Political Philosophy*, The University of Chicago Press, 1982, pp. 89-156.
- Char (René) , [OC] : *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, coll. « Pléiade », 1983.
- Merleau-Ponty (Maurice) , [S] : *Signes*, Paris, Gallimard, 1960.
- [VI] : *Le visible et l'invisible*, suivi de *Notes de travail* (1964) , texte établi par Claude Lefort, accompagné d'un avertissement et d'une postface, Paris, Gallimard, coll. « Tel », 1999.
 - [CS] : *Psychologie et pédagogie de l'enfant. Cours de Sorbonne 1949-1952 (Bulletin de psychologie, 1964)* , Lagrasse, Verdier, coll. « Filosofia », 2001. (『子どもの心理-社会学 ソルボンヌ講義2』、松葉祥一、澤田哲生、酒井麻依子訳、みすず書房、2023年)
- Platon, [Sophiste] : *Le sophiste*, Paris, Éditions « Les Belles Lettres », 1969.
- Sawada (Tetsuo) , [Sawada 2023] : « Corps et Monde dans le mouvement en spirale : la question du « narcissisme » chez Merleau-Ponty », *Levinas et Merleau-Ponty*, éd. par Corinne Pelluchon et Yotetsu Tonaki, Paris Hermann, 2023, pp. 101-113.

(2) 和文の文献

- 酒井麻依子、【酒井2020】：『メルロ＝ポンティ 現れる他者／消える他者 「子どもの心理学・教育学講義」から』、晃洋書房、2020年。
- 澤田哲生、【澤田2020】：『幼年期の現象学 ソルボンヌのメルロ＝ポンティ』、人文書院、2020年。
- 【澤田2023】：「肉・私の肉・世界の肉——後期メルロ＝ポンティにおける身体概念の再考察——」、『モラリア』第30号、東北大学倫理学研究会編、2023年、pp. 137-157。
- 西岡けいこ、【西岡2005】：『教室の生成のために メルロ＝ポンティとワロンに導かれて』、勁草書房、2005年。